

マンチェスターの 栄光と没落そして再生

西川尚武



目次

第一部 はじめに

第二部 英国産業革命のなぞ

第三部 日本繊維産業発展秘史

第四部 マンチエスターの

再生とものづくりの

大切さを次世代に訴える

第一部

はじめに

マンチェスターの 栄光と没落そして再生

西川技術士事務所

西川 尚武

只今ご紹介を頂きました昭和三十七年名古屋工業大学W「
繊維工学科を卒業致しました西川尚武と申します。只今よ
り、「マンチェスターの栄光と没落そして再生」と題しまし
て、約一時間、英国産業革命の歴史とその後の日本のものづ
くりについてのお話をさせて頂きたいと思えます。最後まで
どうぞよろしくお願いたします。

(これは、二〇〇八年五月二十四日、名古屋 中日パレス
で開催された、第四十二回名古屋工業大学同窓会総会にて、
パワーポイントによるスライドを使って、一時間講演をした
ものです。実は同じ原稿は、二〇〇七年日本繊維機械学会誌
VOL60、NO.8号巻頭言にて、「繊維機械技術者からみ
た英国産業革命」と題して、発表した論文と同じものです)

第二部

英国産業革命のなぞ

- **産業革命は 何故 英国から勃発したか？**
- **産業革命は 何故 綿繊維から勃発したか？**

本日のお話の内容を三つに分けますと、第一章は英国産業革命のなぞについてであります。現在の世界のものづくりの原点と言われる産業革命は何故英国から勃発したのでしょうか。例えば、フランスとかスペインからではなく、何故英国から産業革命は勃発したのでしょうか？ 更に疑問は広がります。英国は従来毛織物王国ではなかったのですか。中学時代の歴史教科書には、エンクローージャと称する羊によって農民が牧場から都市に追い出されたという歴史的な大事件を教えられたのにも関わらず、何故、羊毛工業からではなく、綿繊維工業から産業革命は勃発したのでしょうか？

第一章では先ずこのなぞから考えていきたいと思えます。

産業革命発祥地マンチエスター



一九九一年（平成三年）私はトヨタの産業技術記念館創設に際し、どのような博物館を創るべきか、ヨーロッパ各国の博物館を回って調べてこの社命を受け、生まれて初めてイギリス・マンチエスターの駅に降り立ちました。



ロンドンから列車で三時間、マンチェスター・ピカデリー駅に降り立ち、駅からマンチェスターの堂々たるレンガ造りの市街を見渡し、先ず最初に思い浮かべたのは、明治の初めこの同じピカデリー駅に降り立ったある大先輩のことです。

明治の初め、長州藩津和野の出身の山辺丈夫氏は、ロンドン大学就学中、洪沢栄一氏からの特命を受け、一八七九年（明治十二年）紡績技術を学ぶ為、ここマンチェスターにやってきました。山辺丈夫氏は、紡績工場の操業現場に入って、汗と油にまみれて現場実技をマスターし、やがてこの技術を日本に持ち帰り、日本の工業近代化の礎となり、日本の繊維産業をスタートさせた偉大な歴史のパイオニアです。マンチェスターは日本の繊維産業にとって決して忘れることが出来ない、技術伝授の恩恵を受けた、紡績技術のふるさとであります。

（山辺丈夫氏も降り立ったマンチェスター・ピカデリー駅構内一九九一年写す）

（日本の紡績業創始者山辺丈夫氏と当時の英国ロンドン風景）

英国はインドから綿製品を輸入したが……



十七世紀半ば、大英帝国は東インド会社を通じてインドから綿キャラコを大量に輸入し、ヨーロッパに綿製品の大ブームを起しました。ヨーロッパのご婦人方は、インド綿の素晴らしさに魅了され、綿製品は大人気を博しました。しかし、英国の毛織物業者にとって綿繊維は憎むべきライバル商品です。英国毛織物業者の猛烈な輸入禁止運動によって英国政府はとうとう保護貿易主義の立場に立ち、毛織物業者の利益を守り、インド産綿キャラコの英国国内への輸入を千七百年「キャラコ輸入禁止法」によって全面的に禁止してしまいました。

三角貿易で急成長した大英帝国



英国国内への綿製品輸入は全面的に禁止されたのですが、実は意外なところに綿製品の大量の需要先があったのです。アフリカ黒人奴隷を拉致し、他国に売り飛ばす際に綿製品はどうしても必要不可欠商品だったのです。

アフリカ黒人にとってもヨーロッパのご夫人方と同様インド綿キヤラコはあこがれの的であったのです。そして、この綿キヤラコの魅力にだまされて西アフリカ・奴隷海岸から何千万人も黒人奴隷が拉致され、カリブ海西インド諸島農業プランテーションに売り飛ばされ、西インド諸島からは、砂糖、酒、タバコなど贅沢商品が英国に持ち帰えられたのです。英国リバプール港はこの三角貿易のおかげで大繁栄したのです。この地図でも明らかな如く黒人奴隷貿易

易・三角貿易で急成長した大英帝国の玄関口は、英国リバプール港は、黒人奴隷・三角貿易で大繁盛した)
(英国リバプール港は、黒人奴隷・三角貿易で大繁盛した)

奴隷拉致に綿製品は必需品だった



大英帝国は黒人奴隷をどのようにして、アフリカ大陸の奥地からだまし・拉致してきたのでしょうか。実は、赤く染めたインド製綿キヤラコを黒人部落周辺に仕掛けて置いて、黒人を巧妙に海岸までおびき寄せ強引に強制拉致していたのです。やがて奴隷貿易で必要な赤く染めたインド綿キヤラコは、インドから輸入する量だけでは需要に応じきれなくなり、英国自らが原綿を輸入し綿製品を自国で生産する必要が生じてきたのです。三角貿易で儲けたりバブル港大商人達は莫大な資本を隣町マンチエスターに綿製品を自国生産する工場や機械に投資し、マンチエスターを綿織維工業の中心地にさせたのです。ご存知のごとくりバブル港とマンチエスターはすぐ隣町です。

(憧れの綿製品で黒人をおびき寄せ、拉致した大英帝国の暗黒史)

緯糸不足で新機械発明＝産業革命



緯糸不足で新機械発明＝産業革命

産業革命が勃発した最初のきっかけは、綿織物の生産効率が飛
杼^{ハットル}別の名をフライシャットルという簡単な機械の発明によって、
ある日突然一気に上昇したことから始まったと言われています。す
なわち、従来のはた織は、よこ糸を打ちいれるシャットルという道
具を左右交互に飛ばすのに、はた織機機の左右に作業員を配置し
て、互いに投げ合っていたのですが、これを紐でシャットルを左右
に飛ばすフライシャットルというちょっととした機械の発明によって、
一気に織物生産の効率を倍増させたのがきっかけです。

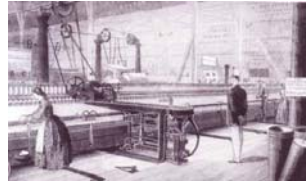
その結果織物の生産効率は上がりましたが、糸を紡ぐ方法は相変
わらず、糸車を手でぐるぐる回して一本の糸を紡いでいたので、市
場に糸が急に足りなくなっていました。そこで、綿糸を糸車で
はなく、機械で大量に生産する必要が生じたてきたのです。

一七六四年、ハーグリーブスはひとつのはずみ車を回して、多数本の糸を紡ぐジェニー紡績機というものを発明し、一七六八年、アークライトは、現在のリング精紡機の原型ともなるウォーターフレームを発明し、綿糸生産の効率を一気に向上させました。しかしここで問題が発生しました。従来伝統的糸車で糸を一本つつ紡ぎ生活の糧としてきた職人達は、自分達の生活手段を奪われたと怒り、暴力的襲撃によって新発明の機械を次々と襲い、破壊活動を重ねました。こうした暴力的襲撃をラディット運動と言います。しかし企業家能力に優れていたアークライトは、工場をこうした暴徒から守るべく、幾つかの対策を講じ、工場経営を実に上手く成し遂げました。アークライトは多数の労働者を雇用する工場制生産方式で大量の紡績糸を生産することに成功し、次々と紡績工場を増設し、英国一の大企業家になっていくというサクセスストーリーの主人公になったのです。

こうした産業革命のきっかけとなった初期段階の幾つかの機械は、今名古屋駅前のトヨタの産業技術記念館に展示しておりますので、是非一度ご覧下さい。

(ジェニー紡績機 ↓ ミュール精紡機ウォーターフレーム紡績機 ↓ リング精紡機)

マンチェスター栄光の一八五十年代



英国マンチェスターの綿織維工業は、隣町リバプール港の奴隷商人が儲けたお金でスタートし、その後順調に発展していきました。十八世紀初頭マンチェスターは機械制工場生産を立ち上げ、瞬く間に「世界の工場」となっていたのです。産業革命は、こうして生産力、すなわち技術力を高めれば、人類の実質的生活水平は向上することを実証していった歴史的な大事件だったのでした。

しかし、産業革命当初人々の生活は必ずしも幸せではありませんでした。一八四二年マンチェスターの紡績工場経営者であったエンゲルスは、当時の工場労働者の悲惨な状況をルポルターージュして「イギリスにおける労働者階級の状態」という一冊の本を書き上げ、これを世に発表しました。この本をパリ亡命中のカール・マルクスが読み、労働者階級の解放を志し、ここに科学的社会主義生まれたのです。

なを、エンゲルスが書いた「イギリスにおける労働者階級の状態」という本は、岩波文庫に上下二冊として今も出版されており、

(世界で始めて綿織維工業の機械化に成功したマンチェスター・産業革命)

綿工業で繁栄したマンチェスター



三角貿易の拠点、英国リバプール港は、奴隷貿易と西インド諸島からの原綿輸入で益々繁栄、莫大な利益を蓄積し、その蓄積はそのまま後背地マンチェスターの綿織維工場に投資していったのです。こうしてマンチェスターはイギリス綿工業の中心地として、急速に発展していきました。「マンチェスターの栄光」はこうして叶えられたのです。

(三角貿易の莫大な利益は、マンチェスターの産業革命を成功へ導いた)

インド綿を壊滅させた大英帝国



十八世紀、英国はマンチェスターの綿織維産業を急速に発展させ、綿製品の輸入国から輸出国に様変わりしていきました。その英国が綿製品の輸先として最初に目をつけたのは工業の発展も遅れ、人口が過剰なインド市場でした。

しかし、ここに大きな障害がたちはだかります。まだ湿気立ち込める早朝、インド、ダッカ地方の労働者達は絶妙な指先で、三百番という超細番手の綿糸を手紡ぎし、これを英国に輸出していたのです。

この素晴らしいインド、ダッカモスリンの品質に比較して、英国の機械制紡績系などは、とても比較になりません。この品質の優れた超細番手のインドダッカ手紡糸は邪魔な存在に過ぎないと判断した大英帝国は、このインドダッカモスリンの伝統的手紡技術を暴力的に地上から抹殺してしまします。

その結果、インドが誇ったダッカモスリン三百番という超高級手紬糸は破滅させられ、英国の機械制綿製品がどつとインドに輸出されていきました。その結果を明確にしたのがこのグラフです。青色線がインドから英国への綿布輸出、赤色線が英国からアジアすなわちインドへの綿布輸出実績です。インドは一八〇〇年初め英国の暴力によって、綿布輸出国から綿布輸入国に逆転させられてしまったのです。

（英国はインドモスリンを壊滅させ、英国製綿製品をインドに輸出した）

インドダツカモスリンは地上から消えた

綿織物供給地から綿花供給地へ

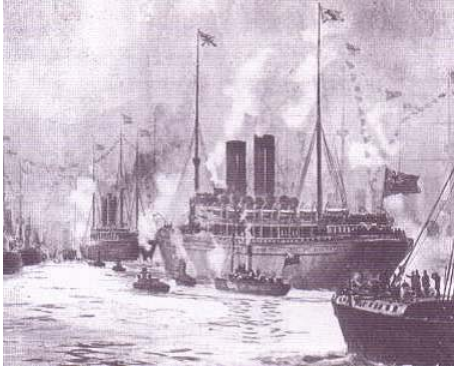


大英帝国のどのようなにして、インドダツカモスリンを壊滅させたのでしょうか。大英帝国植民地支配者達は、なんと驚くべきことには暴力的にインドダツカモスリン職人達の腕を切り落とし、インドダツカモスリンを抹殺させてしまったのです。インド・ダツカ地方の人口は、十八世紀末十五万人もあつたものが、一八四十年にはわずか二万人にまで減少してしまいました。

当時の英国議会には、「ダツカ高原は、ダツカモスリン職工達の白骨で真っ白になった」という恐るべき議会証言記録が今も残っています。英国はインドを綿布輸出国から、綿布輸入国に転落させ、一方ではインドから大量の原綿を英国に輸出させ、英国の工場で綿布に加工し、インドへ再輸出しているのです。この歴史的屈辱の怒りを、ガンジーはインドの系車チャルカに象徴させて、いつもチャルカを回しながら、英国への独立運動の旗印とし闘い続けていました。

(英国人はダツカ高原をモスリン職人の白骨で真っ白にした)

マンチェスターの工業製品は世界に輸出された



こうしてマンチェスターは「世界の工場」にのし上がり、リバプールの港からは、世界各国に向けて、綿製品を始め、各種機械製品をどんどんと輸出していきました。

文字通り、マンチェスターの栄光は世界に輝きました。日本がやっと長い鎖国時代から目が覚めた一八七十年代、マンチェスターは全世界に工業製品を輸出し、「世界の工場」として栄光の頂点にあつたのです。このマンチェスターで、最も大きな繊維機械製造メーカーは、言つまでもなくプラット・ブラザーズ社です。このプラット・ブラザーズ社は、次の時代現在のトヨタ自動車創設と深いつながりを深めていくこととなります。

(マンチェスターは「世界の工場」となり、栄光の時代を迎えた)

産業革命を展示する産業技術記念館



産業革命のきっかけとなった、ジェニー紡績機やウォーターフレーム、そして一七七九年クロンプトンが発明したミュール紡績機等は大英博物館サイエンス・ミュージアムに実物展示されていますが、名古屋駅前のトヨタの産業技術記念館にも、わが国では唯一こうした当時の繊維機械を展示しております。

こうした産業革命初期の機械がどんな構造になっていたか、産業技術記念館に出かけ、是非一度現物をご覧になって頂きたいと思えます。技術史博物館として、名古屋駅前にあります産業技術記念館は、私の知る限り世界一の技術史博物館であり、産業革命の推移もこの博物館によって私達は詳しく学ぶことが出来ます。第一章、産業革命は何故英国で、しかも綿繊維産業から勃発したかについての

なぞはここまでとさせていただきます、次は日本の繊維産業はどのように発展したかをご紹介します。
(名古屋駅前にあります産業技術記念館は世界一の技術史博物館です)

第三部

日本纖維産業發展秘史

マンチェスターの没落と トヨタの源流は
意外なところで、結びついている。

大英博物館サイエンス・ミュージアムに展示さ
れた豊田の G型自動織機

マンチェスターの没落とトヨタの源流は意外なところで、結びついている。
大英博物館サイエンス・ミュージアムに展示された豊田のG型自動織機第二章
では、日本繊維産業発展秘史をご紹介させて頂きたいと思えます。

英国マンチェスターに勃興した産業革命は、瞬く間に世界中に広がっていきま
した。皆様もご存知の如く、日本の近代工業化も明治の初め繊維産業から始まり
ました。日本の繊維産業はものすごい勢いで発展し、瞬く間に世界の注目を集め
るようになってきました。英国に追いつけ、追い越せと意気込む日本の繊維産業
の成長に対して、世界各国からやがてダンピング輸出だとの強い非難を受ける
ようになってきました。しかし、そうした国際非難の中から、次第に日本の技術
力に注目が集まるようになってきたのです。第二章では日本の繊維産業と、豊田
自動車創設に意外なエピソードをお話をさせて頂きます。

日本の近代的紡績産業の発展



一八六七年、薩摩藩鹿児島紡績所にプラット社紡績機械を輸入、操業開始日本の繊維産業発展の歴史は大きく三つの段階に分けられます。

第一ステップは、日本在来の綿業を基礎にして近代的紡績産業に発展させていく戦略でした。幕末期、すでに日本の繊維産業は綿作、紡績、織布という三工程を分化するまでに発展していました。一八六七年薩摩藩島津斉彬によって建設された鹿児島紡績所は英国プラット・ブラザーズ社から最新型紡績機械を輸入し日本で始めて機械制紡績工場を稼動していたのです。その一部の機械は今も鹿児島尚古集成館に近代化遺産として保存されています。

続いてここ三河地方にも縁の深い臥雲辰致のガラ紡等によって日本独自の新しい道が開けないか明治の先輩達は、一生懸命に模索していました。しかし、安価なる英国製綿製品の日本への輸出攻勢はこうした日本の小規模な生産体制を簡単に吹っ飛ばす過激なものであり、日

本の指導者はその強引さに振るえあがり、小規模生産の紡績工場では英国の輸出攻勢にとても太刀打ち出来ないと判断し、第一ステップの道は放棄され、近代的紡績機械輸入による工場生産を急ぐべきだと判断し、第二ステップの時代を迎えました。

渋沢栄一氏が導いた民間活力



第二ステップは、明治政府主導による産業育成政策でした。これが有名な「二千錘」紡績であり、愛知紡績所とか今も幾つかの産業遺跡を残しております。

しかし、この政府案も結局技術移植の本命とはなりえなかったのです。こうして第三ステップの道、渋沢栄一氏が立案した、民間の力で近代的紡績工場を創設していくという遠大な計画が登場しました。

渋沢栄一氏は、第一国立銀行等を立ち上げ、生涯にわたって民間企業の活力育成にかかわった人であり、日本近代資本主義経済発展の基礎造りに貢献された方の民間の力で日本に繊維産業を興隆させていくこととそ

でもありました。渋沢栄一氏は、政府の力ではなく、の先頭に立たれたのです。

（近代的紡績工場は民間の力でスタートさせると、先頭に立った渋沢栄一氏）

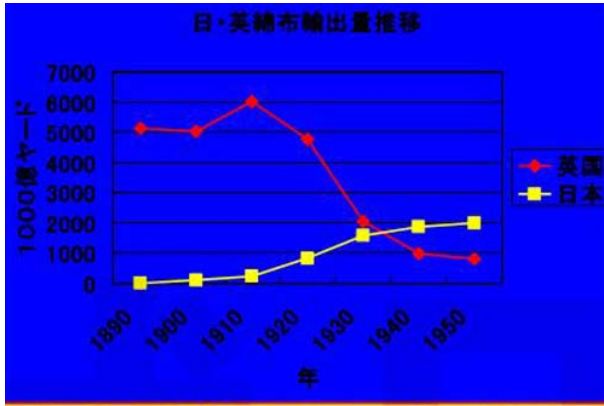
明治の紡績はマンチエスターから出発



一八七九年（明治十二年）、渋沢栄一氏はロンドン大学留学中であつた山辺丈夫氏に白羽の矢を立て、ロンドン大学を途中退学させ、直ちにマンチエスターの紡績工場に出発させ、工場現場にて、近代紡績技術の習得に専念させました。

山辺丈夫氏に続いて、次々と、当時の官立工部大学校出身のエンジニア達は英国に留学、紡績工場で技術習得を行い、日本の民間紡績事業を勃興させていきました。こうして、真の近代的な技術的基礎にたつた紡績工場が千八百八十三年（明治十六年）以降日本にも次々と発足していきました。この写真は、渋沢栄一・山辺丈夫氏等が大阪紡績として日本で始めて紡績工場を創設した、ありし日の東洋紡績三軒家工場の写真です。

（渋沢栄一氏・山辺丈夫氏等の努力で創立した大阪紡績「現代の東洋紡績」）



英国に追いつき、
追い越した日本

日・英綿布輸出量推移 (単位 1000 億ヤード)

年代	英国綿布輸出量	日本綿布輸出量
1890年	0	5100
1900年	100	5000
1910年	200	6000
1920年	900	4800
1930年	1500	2000
1940年	1900	1000
1950年	2000	900

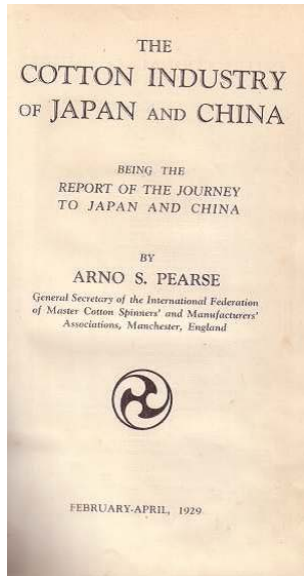
英国に追いつき追い越してしまっ た

一九三〇年日本の綿布輸出量は、英国に追いつき追い越してしまっ

先輩達のこつした努力で日本にも工場制大量生産方式による機械制繊維工業がスタートし、明治・大正と殖産興業の国家戦略にもそって、日本の繊維産業は驚異的な発展を遂げていきました。日本中いたるところに紡績工場は建設され、昭和の始め、日本の繊維産業輸出実績はとうとう英国に追いつき追い越し、世界のトップに躍り出ました。

日本の急激な追い上げは、マンチエスターの紡績経営者達を振るえ上げさせました。当時の英国の雑誌を読みますと、東洋の小国日本恐るべしというセンセーショナルな記事が一杯載っています。日本の紡績は安い賃金で、女子労働者を酷使し、ダンピング輸出しているのではないかとのヨーロッパ人のするどい目が日本の紡績業に注がれるようになってきました。このグラフでご覧のように、一九三〇年代には、とうとう日本の綿布輸出実績は、英国の綿布輸出実績を追い抜き、追い越してしまいました。これは英国マンチエスターにとって一大事です。

英国人が驚いた日本の技術力



一九二八年（昭和三年）東洋の小国・日本の紡績産業の強さの秘密を解明しようと、マンチエスター紡績協会専務理事アルノ・S・ピアス氏一行は、大挙して日本にやって来て、当時の日本の繊維産業の実情を徹底的に調査し、一冊の膨大な報告書にまとめました。

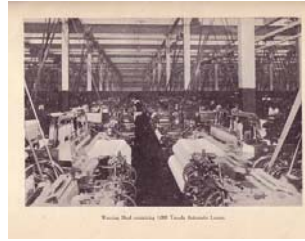
これが、世界的に有名な「Cotton industry of Japan & China」というマンチエスター紡績協会発行の調査報告書です。この本は、全世界が注目したベストセラーになりました。

今では、もうこの本を古本屋で見つけることは不可能となりましたが、私は偶然の機会にこの本を手に入れ、つぶさに読むことができました。この本の結論には、今や世界の繊維王国となった日本の輸出競争力のヒミツは、女子労働者を過酷に搾取する女工哀史による低賃金労働、ダンピング輸出ではなく、日本の技術力が英国より優れているからこそ、日本の繊維輸出実績は伸びるのだという極めて客観的な視点か

ら綿密に書かれています。時の英国でよくぞここまで日本を正しく評価してくれたと感謝したくなる立派な調査報告書です。

(マンチエスター紡績協会から来日した調査団がまとめた、日本の紡績産業実態の綿密な調査報告書世界的なベストセラーですが、私は古本屋で偶然見つけました)

日本の強さは技術力にあり



このマンチエスター紡績協会発行の調査報告書には、膨大なデータと共に、数多くの現場写真も掲載されています。この報告書の中で、特に注目されるのは、日本のあちこちの工場で稼動している豊田のG型自動織機の性能は素晴らしく、なんと五十台の織機をたった一人の作業員で稼動していると驚きの表現で、その操業風景写真を掲載しています。

極めて良心的な調査報告書です。第一次世界大戦後のヨーロッパでは、東洋の小国・日本を見る目が次第に厳しくなっていく中で、よくぞここまで日本を弁護して書いてくれたと、感謝したくなる立派な調査報告書です。

この報告書が、当時の英国で大センセーションを呼びおこしたことは言うまでもありません。実はこの調査報告書を読んで、歴史的決断をした英国の大メーカーがありました。当時の世界一の繊維機械メーカープラット・ブラザーズ社です。プラット・ブラザーズ社はこの調査報告書を読んで豊田の自動織機の特許を即時買い取る決意をしたのです。

(英国プラット社は報告書を見て、G型自動織機特許を十億円で買い取る)

特許料を基に自動車進出、豊田の転機



世界的にベストセラーとなったこの本を読んで、当時の世界のトップ繊維機械メーカー、プラット・ブラザーズ社は豊田のG型自動織機の特許料を当時の金で百万円、現在の金に換算すると約十億円で即時買い取る決意をします。日本の特許が海外に売れたのは、勿論明治以来これが初めてです。トヨタはこの特許料をもとにして、豊田佐吉氏の長男であり、当時東京帝国大学機械工学科に学んだ豊田喜一郎氏を中心に、自動車の研究に取り組んでいくこととなります。一九三四年（昭和八年）豊田自動織機に自動車部を発足、自動車の研究・開発に乗り出していきます。

こうしてマンチェスターと日本のトヨタは歴史的に結びついていくのですが、実は、この歴史を大きく評価した英国は、一千年（平成十二年）大英博物館サイエンス・ミュージアムにG型自動織機を常設展示することを決定、今日サイエンス・ミュージアム入口近くにG型自動織機を常設展示しています。日本の発明品でサイエンス・ミュージアムに展示されているのは、G型自動織機だけではないでしょうか。

（G型自動織機特許料で直ちに自動車研究を開始した豊田佐吉氏の長男豊田喜一郎氏）

紡績斜陽化でマンチエスターは急速に没落



一九九一年九月、私は、トヨタの産業技術記念館創設企画調査の為、重役と共にマンチエスター・ピカデリー駅を降り立ちました。

しかし、ピカデリー駅の外に一旦出るとすぐに、異様な雰囲気を感じました。マンチエスターのレンガ造りの高層建築群はそのままですが、マンチエスターの町は完全にゴーストタウン化し、街角には人一人歩いていません。繁栄したあの世界の工場マンチエスターの栄光を忍ばせる歴史的建造物はそのままですが、先進国宿命である産業空洞化はここマンチエスターでも深刻に浸透し、マンチエスターの街角には人の気配がありません。百年前のマンチエスターの活気は想像することも出来ず、ただ豪華な歴史的建造物だけが、当時の繁栄を忍ばせているだけでした。いやそれどころか、百年前は紡績労働者で賑わっていた住宅地区も今はスラム街と化し、町のあちこちからは悪臭が漂ってきました。

(マンチエスターも先進国空洞化で市内はゴーストタウンと化していた)

英国人が書いた、紡績産業没落の嘆き

バウカー氏著
谷口豊三郎訳

ランカシアの歩んだ道

——栄光から没落へ——

何故マンチェスターの紡績業は没落の運命を辿ったのでしょうか。実はこの問題に関してマンチェスターの紡績経営者バウカー氏が一九二八年（昭和三年）に書いた「ランカシアの歩んだ道」という本を、戦後東洋紡の谷口豊三郎氏が翻訳され、出版されています。一九二八年に書かれたこのマンチェスター紡績業者の述懐によれば、「マンチェスターの紡績経営者達は、世界一の工業国という栄光にあまりにも安住し過ぎ、優越意識をいつまでも捨てきれなかったのが原因でマンチェスターは没落した」と述懐しているのです。では、当時マンチェスターのプラット・ブラザーズ社と特許契約をした豊田喜一郎氏は一九一九年の時代状況をどのように把握し、どんな企業戦略を展開していったのでしょうか。

英国人が書いた、紡績産業没落の嘆き（東洋紡社長谷口氏が翻訳）。

ランカシアの歩んだ道 栄光から没落へ

マンチェスター経営者のうめき声を記した一冊の本、過去の栄光に安住し過ぎていた。

- 人は疲れて果てている。
- 機械は壊れている。
- 栄光は永遠に去ってしまった。

マンチエスターの栄光と没落の影に



一九二九年（昭和四年）豊田喜一郎氏は、プラット・ブラザーズ社との特許契約の為、渡欧しています。しかし、この時プラット・ブラザーズ社も、そして日本の紡績業も深刻な不況に陥っていたのです。豊田喜一郎氏は繊維産業の将来性に疑問を持ち、企業として新しい方向を密かに模索し始めます。プラット・ブラザーズ社から帰国した翌月、豊田喜一郎氏は早速豊田自動織機製作所に自動車研究室を新設、密かに自動車産業進出を決意します。豊田喜一郎氏の時代認識と、事業展開の決断の裏には、マンチエスターの栄光と没落が大きく影を落としていたことは事実です。

この写真は、大英博物館サイエンス・ミュージアムに展示されているプラット・ブラザーズ社が特許購入した豊田のG型自動織機です。プラット・ブラザーズ社はその後、経営戦略をいろいろと展開し時代適応を模索していきますがいずれも失敗し、結局戦後事業閉鎖に追い込まれ、今は会社自体が無くなってしまいました。

（大英博物館に展示されたプラット社が特許購入した豊田G型自動織機）

第四部

マンチエスターの
再生とものづくりの
大切さを次世代に訴える

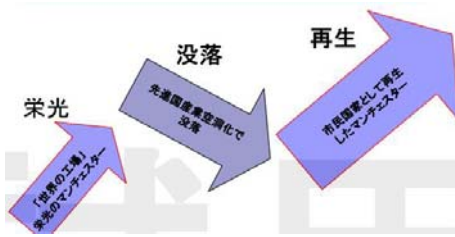
■マンチェスターの再生は市民力が中心となっている！！

■ものづくりの大切さこそ

次世代若者のモットーに！！

第三章は、没落したマンチェスターがその後どう再生したかという身につまされるテーマと共に、ものづくりの大切さこそ、次世代の若者に自覚して頂きたいテーマであると訴えて、本日のお話を締めくくりたいと思います。

マンチェスターは、第二次世界大戦後、急速に没落していききました。戦後独立を成し遂げた後進国諸国は、先ず繊維産業から近代化学工業を発足していきます。マンチェスターの荒廃は深刻でした。しかし、幸いにしてその後マンチェスターは奇跡的に再生に成功しました。ではどうやってマンチェスターは再生に成功したのでしょうか。第三章では現代のマンチェスターをご紹介します。



マンチェスターの栄光と没落そして再生

英国産業革命は、マンチェスターを「世界の工場」にのし上げ大英帝国に繁栄をもたらしました。しかし、第二次世界大戦後、マンチェスターは先進国産業空洞化現象で街はどんどんと荒廃、ゴーストタウン化し、市街地のスラム化、若年労働者の滞留、人口の流失など様々な問題が重なり合いました。当時の英国の深刻な状態を大宅壮一氏も「大英帝国の没落」と題してあちこちで書いておられます。

マンチェスターの街は活気を取り戻した



六十歳で定年を迎えた私は、退職五年後の、二〇〇五年（平成十七年）三月再びマンチェスターへ「英国産業革命発祥地を訪ねる旅」のメンバーとして再訪問しました。

ところがマンチェスターは十五年前と比較して、驚くほど新しい活気に満ちあふれていました。

スラム街は、区画整理され、街は学園都市、IT産業都市として生まれ代わり、若者は街にあふれ、先進国産業空洞化現象は見事に克服されていました。マンチェスターといえば、今は皆様も良くご存知な如く大サッカークラブがあり、英国を代表する音楽バンドがあり、学園都市・研究都市として多くの文化知識人を集め、ロンドンに次ぐ、英国第二の大都市として再生したのです。では何故マンチェスターは再生することができたの

でしょうか。

（二〇〇五年マンチェスターを十五年ぶりに再訪問、そこには再生したマンチェスターがあった）

マンチエスターの再生は市民力から



私は、何故マンチエスターは奇跡の再生を成し遂げることが出来たのか、いろいろと調べてみました。インターネットで「マンチエスターの再生」とキーワードを打ち込んでみますと、驚くほど、多くのファイルがマンチエスターの再生について、論じられていることが判ります。

実はマンチエスターの再生は、世界的な注目を受けているテーマでして、文献も研究報告も沢山出ていることを知りました。また最近大阪が「マンチエスターに学べ」と大キャンペーンを展開していることも知りました。これらの文献を読んで、マンチエスターの再生のキーワードは市民力にあると知りました。この写真は、市民力と関係の深いマルクスの墓の前に立つ私の写真と、矢張り市民力について解説している岩波新書「ブレア時代のイギリス」のご紹介です。



(マンチエスターの再生を紹介する岩波新書「ブレア時代のイギリス」)

一九九十年代イタリア人街から都市再生の市民力

市民力はコミュニティ建築を推進したインフラを整備し、街に賑わいを取り戻した定住人口を増やすプロジェクトを推進した行政側は、住民参加の協力体制で対話を重視資金面は、市民主導の政府資金給付で支援した市民力中心の哲学がブレア政権を動かしたマンチェスター再生のヒミツ、マンチェスターの再生は、一九九十年（平成二年）イタリア人街から、都市再生を願う市民力のうねりとしてスタートしました。市民力はコミュニティ建築と呼ばれるNPOによるインフラ整備運動を展開、町に賑わいを取り戻し、定住人口を増やしました。このプロジェクトの成功は、住民参加の徹底と、行政側の資金的協力支援があったからだとされています。ブレア政権の「ニューディール・プログラム」の成功例として高く評価されています。

若者よ、「もの造りの大切さ」を学べ



私は、マンチエスターの再生は、言うまでもなく研究都市、学園都市化によるIT産業の活性化にあったと考えています。産業革命が歴史的に実証してくれた如く、産業の興隆があつて、初めて人々の実質的生活向上はかなえられるという歴史哲学がマンチエスターの人々の胸にあつたからこそ、マンチエスターの再生は成功したのだと考えています。

最近日本の高校生は、工学部に学び、技術者の道を選択することに、私どもの時代ほど憧れではなくなっていると聞いております。「もの造りの大切さ」が若者の意識から薄れ始めているようです。

思えば、人類の実質的生活向上は、技術を高め、生産力を充実することによって初めて叶えられることを産業革命は私達に実証してくれました。我々は、「もの造りの大切さ」を若い人々にもつと訴え、明日の日本を技術立国のリーダーとして頑張つて頂きたいと願っています。このスライドを終わるに当たつて、もう一度、私は若者よ、ものづくりの大切さを学べと強く訴えて、このお話を終わりたいと思います。

長時間のご静聴を心よりお礼申し上げます。

マンチエスターの栄光と没落そして再生

二〇〇八年十二月十日 初版第一刷発行

著者 西川尚武
装幀者 西川尚武
発行者 片倉啓文

FSS企画
兵庫県三原郡南淡町福良甲一五三 一―一―四六
〒六五六―〇五〇―一
電話(〇七九九)五三一―三三七

印刷製本
刷本価
FSS企画
FSS企画
非売品

ISBN